paranoia

セットン

「面倒くさいな…」

あれからまだ一週間しか経っていない。
だがそんなことは個人の都合でしかない。
だから僕は行かなければならない。
今日は進学先での説明会だ。
行かなくても良いが、あとあと面倒なので仕方なく行く事にした。

同じ中学出身の人もいるにはいた。
でも僕は誰とも同じクラスにはならなかった。
どうやら見事に全員分散させられたみたいだった。
昇降口で眺めるクラス発表の掲示を見ていてふと気付いた。
«彼女»がいることに。
同じ名前だった。漢字も全く同じ。
見つけなくていいものを見つけてしまった……。
僕はイライラして舌打ちした。
何人かこちらを見たような気がしたがどうでもよかった。

クラスには初めて見る顔しかいなかった。
だがそんなこと知るものか。
僕はもう……
クラス内の話し声が鬱陶しかった。

体育館に移動して副校長からの話があった。

「ここで出会った人は一生の友になります」

奴は偉そうに言い放った。
そんなわけあるか。
一生の友だって？　笑わせてくれる。
3年間。それだけの期間で何が出来る？
1095日。
26280時間。
1576800分。
94608000秒。
たかがその程度だ。
そんな薄っぺらい関係に何の意味がある？
たった3年間付き合ったくらいで一生の友になんかならない。
信じられるわけがない。
くだらない。くだらなすぎる。
……。
……僕の頭はそればかりを反芻していた。
何について話があったのかは全く覚えていない。

短い休みも終わり、いよいよ高校生活が始まる。
誰もが新しい出会いに期待し、畏怖する。
だがそれはあくまで一般論。僕には関係ないことだ。
出会いなんて求めるはずもない。

学校生活はひどくつまらないものだった。
まわりではいくつかのグループが形成され、みな楽しい生活を送っている。
そんな中でもそれに混ざりたいとは全く思わなかった。
自転車で登校し、授業を受け、下校する。
その繰り返し。
毎日が単調で、変化がない。
こんなことになったのも全部«彼女»のせいだ。
«彼女»のせいで僕の人生はおかしくなったんだ。

——

それはまだ僕が卒業する前。
説明会よりもっと前の話。

僕には好きな人がいた。
それは偶然としかいいようのない再会から始まった。
幼稚園時代、僕と彼女は同じ組だった。
卒園後、僕とは別の小学校に通った。
中学の入学式、僕は彼女の名前を見つけた。
でもクラスは一緒じゃなかった。
3年生のクラス替えで同じクラスになった。
実に9年ぶりの再会だった。
幼なじみといって良いかは分からないけれど、お互い過去を知っているもの同士。
そういうわけかは知らないがすぐに打ち解けた。
9年間の時間の埋め合わせをするようにたくさん会話をした。
そのうちに同じ班になり席が隣になった。
それからはもっと話をするようになった。
一緒に帰ったりもした。家の方向が違うから途中までだったけど。
そしてあるとき気がついた。
僕はどうして彼女と話すのが楽しいんだろうと。
学校なんてつまらないはずなのに、どうして行くのが楽しみなのかと。
答えは単純。好きだからに決まってる。
それから僕は半年間片想いを続けた。
話せればそれでいい。僕はこの関係に満足していた。
そう、毎日が輝いていたんだ。

冬になった。
みんな受験で忙しい中、僕と彼女は推薦で早々と進学先を決めた。
受験を控えた生徒は学校に出てくる必要がないから教室はがらがらだった。
僕と彼女の席のまわりには誰もいなかった。ほぼ2人きり。
だからこのチャンスを生かしてもっと近づこうとした。
彼女のことをもっとよく知りたい。
そう思うようになったら胸が苦しくなった。
今まで満足していた関係に満足できなくなった。
漠然とした好きという想いが明確な恋愛感情に変わった瞬間だった。
みんなが受験を終える2月後半まではほとんど2人きりの状態が続いた。
僕は毎日が楽しくて仕方なかった。
学校に行けば隣に自分の好きな人がいる。なんと素敵なことなんだろう。僕は浮かれていた。

そんな２月も終わりに近いある日、僕は廊下を歩く彼女の後姿をみて自然と思った。
想いを伝えないと。
それからは大変だった。
なんとかして2人きりになれるタイミングを探さなければならない。
掃除の時に何度か良い機会があったが逃してしまった。
なかなか機会が訪れず卒業式の一週間前になった。
給食配膳前のわずかな隙をついて僕は放課後電話をする約束をとりつけた。
屋上に呼び出そうとしたが面倒だからと拒否された。
ともかく放課後。家。
心臓が飛び出すくらい鼓動が早い。指も震える。
それでもなんとか連絡網から彼女の電話番号を見ながら押していく。
ダイヤルしたあとに通話ボタンを押すか押さないかで葛藤する。
この時の緊張感と言ったら言葉には表わすことができないくらいのものだった。
何度目かの呼び出し音のあと、彼女の声が受話器越しに聞こえてきた。
最初から言うのはなんなので、世間話からはじめた。
そこから他愛もない話をした。
進路のこと。
友達のこと。
自分たちのこと。
気がついたら2時間近くも話していた。
まずい。
このままだと何も言えないまま終わってしまう。
僕は意を決して、それまでの流れから離れ唐突に、生まれて初めての告白をした。
寝る前に何度もイメージトレーニングをしてたけど、全くその通りにはいかなかった。初めてなんてみんなそんなものだ。
僕はその時こう言ったんだ。

「俺が好きなのは…お前なんだ。　でも別に付き合って欲しいわけじゃない。ただ伝えておきたくて…」

そう。付き合って欲しいわけじゃない。僕が好きだということを知って欲しかった。
それに対して彼女はこう答えた。
自分にも好きな人がいたら告白していただろうこと。何度も同じ人から告白されていること。
僕は彼女に好きな人がいなくて安心した。
でも彼女がそう答えるということは、僕のことは仲のいい友達としか思っていないということ。
つまり見事に玉砕したわけだ。
それから僕はその後にこう続けた。

「でも俺がこういうこと言ったからって気まずくなるのはなしね？」

僕が一番恐れていたのはこれだ。そのための予防線を張った。
想いは伝わらなかった。しかし、その後も好きで居続けることは変わりない。

だからこそ、それが一番怖かった。
彼女はしつこく告白してくる奴とは別に気まずくなってないから大丈夫だと言ってくれた。
それなら良かった。僕は心強く感じた。これで彼女を失わなくて済む。
かっこ悪いかもしれない。ずるいと言われるかもしれない。
何といわれようと僕は彼女を失うことが怖かったんだ。
こうして僕の人生初告白は幕を閉じた……。

週が明けた。
彼女はいつも通り僕の隣の席で笑っていた。

次の日。
僕は違和感を感じた。
いつも話しかけてくる彼女が今日に限って話してこない。
そういう日もあるとは思ったがどうにも引っ掛かった。

翌日。
この日も彼女は僕と話すことはなかった。
それどころかこちらを向くことすらなかった。
ずっと別の人と喋っている。
僕はいたたまれなかった。
おかしい。絶対おかしい。
だって僕はあの日確かに約束したはずだから。

あくる日。
僕の存在はないものとして扱われているようだった。

僕以外のみんなと会話をしていた。
隣にいるのに振り向いてもらえない。
手を伸ばせばそこにいる。
だけど触れることはかなわない。
まるでマジックミラーの外側から見ているような、そんな感覚。
僕は約束をした。
気まずくなることはないと。ちゃんと話をしてくれると。
大丈夫だって言ってくれた。
僕はその言葉を信じていた。
それだけが救いだった。
それなのに今目の前で起こっている光景は何なのだろう。
不安が現実となったのだろうか。
誰かがなにをしたわけでもない。
わからない。
どうして彼女がそうなってしまっているのかわからない。
理解できない。
いや、理解しようとしていないだけかもしれない。
彼女の温かい笑顔も今は凍てついたもののようにひどく冷たく見える。
僕はどうすればいいんだ……。
今にも泣き出しそうな空に自分を重ねている自分がいた。
もう耐えられそうにない。
今すぐここから逃げ出したい。なんでもいいから叫びたい。
そんな気持ちで心がいっぱいだった…。
だから僕は現実から目を背けることにした。
瞳を閉じた。
まぶたの裏に彼女との思い出が焼きついている。
付き合っていたわけじゃない。でも、それでも楽しかった。
一緒にいた時間が。
こんなにも僕は彼女のことが好きなのに。
目を開けばそこには受け入れられない現実がある。
もう終わりなのか……。
そう思った途端、僕の世界は崩壊した。
皮一枚で維持されていたものが一気に崩れ去った。
僕の思い出が…
一緒にいた時間が…
次々と色を失いながら剥がれ落ちていく。
僕は……見捨てられたんだ。
なぜかそんな考えが過った。
あんな変な奴は無視しちゃおうって。
それならあの告白し続けてた奴はどうなる？　なんであいつだけ例外なんだ？
どうして僕だけが弾かれているんだろう？
彼女の世界からなぜ拒絶されているのか？

考えれば考えるほどわからなくなった。
僕は独り、声にならない叫びをあげていた。

ついに卒業式の朝になった。
僕は今日ここから去らなければならない。
この学校に思い出なんて一つもない。
もうなくなってしまったから。
ただ…一つだけ心残りがあるとすれば。
最後に彼女と笑いながら話したかった。
もう今となっては叶うことのない夢だ。

式の内容は覚えていない。
そんなものはどうでもよかったから。
覚えているのは証書をもらうのに時間がかかりすぎたこと、歌の時にみんなが泣いてたことくらいだ。
式の後一度教室へ戻り、荷物を全て持って校庭へ出た。在校生に見送られるためにだ。
そこでは最後の別れを惜しむかのように雑談が繰り広げられていた。
きっと第二のボタンをせびっているのだろう。
僕はその時彼女の近くにいた。
まだ諦め切れなかったんだ。往生際が悪いにも程がある。
だが、結論から言えばその選択は間違っていた。近くにいるべきではなかった。
僕は見てはいけないものを目にしてしまったんだ。
それは彼女が男子から校章を受け取っている場面だった。
別になんとはない光景。この状況ではごくごく自然な光景。
でも僕は一瞬何が起こっているのか理解できなかった。
そうじゃない。理解したくなかった。
校章を、受け取る。たったそれだけの行為。
でもそれだけで十分すぎた。
僕は馬鹿だ……。
そこに至るまで分からなかったなんて。
彼女にも好きな人がいたんだ。
……。
……？
…いや…おかしい。
そうだ。彼女は好きな人はいない、いたら告白してたかもねと電話で言ったはずだ。
結局全部嘘だったのか。
僕を傷つけないように気を遣ったのかもしれない。
でもそれは逆効果だったみたいだ。
きっと彼女は僕が告白する前から好きな人がいたんだ。
僕に告白されたことで彼女の中で僕に対する見方が変わった。
だから意図的に僕を避けた。自らの矛盾に気付かずに。
僕は彼女が好きだった。それはこの光景を目の当たりにしても変わらない。
本人だってそれを知っているはずだ。
僕が目の前にいるってことも。
それを知ってて…校章を受け取ったんだ。
……僕は裏切られた。
自らの利益を優先するために捨てられたのだ。
世界で一番好きな人に裏切られた。
僕の初恋だったのに…
初めて人を真剣に好きになったのに…
だから怖かった。それでも勇気をだして告白したんだ…
それなのに…それなのに…そんなことってあるか…？
目の前が真っ暗になった。

さっきまで耳に入ってきた雑音も聞こえなくなった。
僕の、世界が、閉じた。
喪失感？　いや違う。
これは絶望。
僕はそれを認識してしまった。
途端、心が砕け散った。
心が音をたてて砕け散った。
信じてた…
大丈夫だって…言ってくれた…
あいつとは普通に話してるから平気だよって…言ってくれた…
本当に？　って聞いたら笑いながらうんって言ってくれた…
大丈夫だって思えた…
約束……したのに……
約束したんだ……
それなのに…
どうして……
どうして…そんなことするの……？
それなら最初から言ってくれればよかったのに…
僕何か悪いことしたかな……？
好きって言ったらダメだったのかな……迷惑だったのかな……？
僕はただ好きだっただけなのに……
なんで……

泣きそうだった。
でも、泣けなかった。
どうしてだろう。泣けなかった。

僕はその日から絶望の淵を彷徨い続けた。
信じてたのに、裏切られる。
約束したのに、裏切られる。
好きだった人に、裏切られる。
僕の心には何か漆黒の、ドロドロとしたものが渦巻いてるようだった。

あいつがわるい

ぼくはわるくない

ぼくはなんにもしてない

ひとのこころをふみにじった

ひとのこころをこわした

ゆるさない

ぼくはぜったいゆるさない

責めた

謗った

憎んだ

恨んだ

蔑んだ

罵った

呪った

僕は深く深く、奈落の底へと沈んで行った…

もう誰も信じない

信じたりなんかしない

どうせまた裏切られるんだから

人間なんて所詮そんなもの

自分のことが可愛い生き物だから

他人のことなんか見てみぬふり

殊更女なんて生き物はみんなそうなんだ

嘘つきだ

口からでまかせを言ってたぶらかすんだ

信じられない

信じたくない

もういやだ

こんなのもういやだ

いらない

そんなのいらない

ドモダチ？　シンユウ？

そんなのいらない

自分は自分

他人は他人

いざとなれば平気で裏切る

そんなのいらない

みんな死ねばいいんだ

消えちゃえばいいんだ

死ね

死ね

死ね

僕の愛情は憎悪へと変貌した。
人としての心を失った。
信じること
好きになること
それができない。
喜と楽が抜け落ちた。
もうこれ以上自分が傷つかないように。
——

梅雨の季節に入る少し手前。
僕の真新しい携帯にメールが届いた。
宛先を確認するが身に覚えがないアドレスからだった。
中身を見るとそこには非常に見慣れた文字列が一行。
そう、«彼女»の名前だ。
«彼女»は僕のアドレスをどこからか聞きつけてメールを送ってきたらしい。
どうして……もう僕に用はないはずなのに。
僕のことは捨てたはずなのに。
なんで今更になって連絡してくるのか。
全く理解できなかった。
«彼女»はあの時のことを謝る素振りは一切見せなかった。むしろ悪気はないと思っているから当然といえば当然か。
僕も謝ってもらう気は全くないから別にいいのだが…。
第一、謝って済む問題じゃない。

«彼女»の用件はこうだった。
—中学の体育祭に行かないか—
そうして«彼女»はまた、僕の人生を狂わせる。

【続？】